

バウハウスと女性たち

お茶の水女子大学名誉教授 田中辰明

建築やデザインの世界に、今なお影響を与え続けているバウハウス。創立100年となった2019年、発祥の地ドイツでは様々な行事が行われた。バウハウスとは何だったのか、その活動を支えた女性たちを見てみたい。



「バウハウスの階段」(Bauhaustreppe)。教員であったオスカー・シュレンマーの作品。女性の社会進出を表徴。1932年。

芸術と技術の統合を目指して

バウハウスは第一次大戦後の1919年に、ドイツ中部の歴史的な文化都市ヴァイマルに設立された国立の学校だ。写真、工芸、陶芸、舞台、デザインなどを含む美術と建築の総合的な教育を行い、デッサウ、ベルリンと拠点を移し、33年のナチスの台頭により弾圧を受け閉校した。わずか14年間ながら、合理主義的、機能主義的な芸術を目指し、モダニズム運動を行った。

教授陣は素晴らしく、パウル・クレー(画家)、オスカー・シュレンマー(画家・造形家)、ヴァシリー・カンディンスキー(画家)、ライオネル・フェアインガー(画家)など、この時代を代表する芸術家が名を連ねていた。加えて、芸術教育に力を入



バウハウス、デッサウ校。初代校長グロピウスの設計による(1925～26)。世界文化遺産。

れたヨハネス・イッテンなどがいた。

芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとした彼らの業績は、現在も芸術教育に大きな影響を与えている。初代校長ヴァルター・グロピウス、3代目校長ミース・ファン・デル・ローエは、ライトやコルビュジエと並ぶ近代の大建築家である。閉校後、教授陣の多くは主に米国へ亡命し、そこで大きな影響力を持った。

バウハウスで活躍した女性たち

バウハウスの14年間はヴァイマル共和国の時代と一致する。共和国は民主的な憲法のもと、女性も参政権が与えられ、理想国家のように見えたが、政権がよく交替する不安定な国家であった。バウハウスはこの

時代に発足した国立校だったため、女性の入学志願者が多かった。それまで大学で学ぶ女性は稀で、初代校長のグロピウスは大いに驚いたが、入学を許可した。

しかし彼は女性を重要視せず、織物工房へ配属させて運営資金を稼ごうとし、女工のように扱ったようだ。女性の入学者数を全定員の3分の1以下にするとの宣言を出し、「女性は物体を平面で捉えることはできても立体で捉えることはできない。建築は立体であるので女性には無理である」と、建築学習も拒否した。

女性たちは葛藤の中でも、イッテンやクレーから受けた基礎教育の知識を生かし、織物工房で見事な作品を創造していく。通算500名の女性が織物や染色などの技術を習得し、社会進出を果たした。大活躍した女

性たちについて紹介しよう。

□グンタ・シュテルツル

初代女性教員(マイスター)(Meisterin)、織物工房の主任。織物工房の作品は市場でも人気が高く、その売上は学校運営に大いに寄与したが、給与も工房の地位も男性より低かった。ベルリンのパウハウスアーカイブ(文書保管所)にはグロピウスとの交換文書が残っており、筆者も目を通した。待遇の改定が認められなければ辞職するとまで書いた彼女に、グロピウスは「改定は認めるものの任期は定めない」と回答している。

□アルマ・ジードホフ・ブツシャー

家具と玩具のデザイナーとして活躍。ベルリンの国立工芸美術館で学んだ後、パウハウス織物工房へ。23年に家具工房に移る。「アム・ホルンの住宅」で子ども部屋の設計や家具、

玩具の製作を行い、注目された。子どもを観察し、フランス人形のように見るだけの人形が主流であったころ、投げて遊べる人形を開発した。

□マリアンネ・ブランド

金属工房に所属、助手を経て主任となる。卓越した才能を発揮し、照明器具を開発、メーカーに製造させ、パウハウスの財源となった。灰皿、ティーセットや家具の製造も。戦後は旧東ドイツのドレスデン、東ベルリンで教鞭をとった。

□ゲルトルート・アルント

ポーランド出身。織物工房へ進んだ後、写真の創作に力を入れ、女性らしさを強調したセルフポートレートで有名に。モンタージュ写真も制作した。しかし本来は建築家志望で、「本当は建築家になりたかった」という著書を残している。



ヴァイマルの校長室で筆者。絨毯はゲルトルト・アルント、机上のランプはマリアンネ・ブラントの作品。



織物工場の女性たち。創立2年目には「女子部」が創設された。女工のように扱われることへの不満を表す写真。

□ フリードル・ディッカー

オーストリア生まれ。イッテンがウィーンで開いた美術学校で学ぶ。1919年イッテンが招聘されたのを機にバウハウスに移る。23年に同僚のフランツ・ジנגラーをパートナーにベルリンで「造形美術学校」を、25年ウィーンでデザインスタジオを開設。家具類を設計、デザイン性の高さが評判を呼んだ。しかしパートナーがユダヤ人であったため、アウシュビッツ強制収容所で殺害された。解放後、ディッカーが強制収容所で教えていた子どもたちの絵画が多数発見され、話題となった。

□ 山脇道子

お茶の水女子大学の前身、お茶の水東京女子高等師範学校付属幼稚園・小学校・高等女学校を卒業。婿養子の山脇巖と共にバウハウスに留

学、織物工房で学ぶ。

パウハウス75年記念の年に出版した自著『パウハウスと茶の湯』（新潮社）には「茶の湯の世界に生まれた20歳の日本人女性が（中略）カンデンスキーやアルバースから親身な指導を受けクレーの前で日舞を踊り、ミス・ファン・デル・ローエとすき焼きパーティ……黄金のモダニズム期を痛快に生きた。おしゃまなモダンガールの回顧録」とある。帰国後は気鋭のテキスタイル・デザイナーとして活躍、モガの代表として雑誌モデも務めた。

□デルテ・ヘルム

ベルリン生まれ、ドイツ北部の港町ロストックで育つ。美術、造形の才能に恵まれ、孤児院で美術教育も行う。グロピウスに勧誘され、入学。たちまち頭角を現した。昨年の創立

100年記念で、ドイツの公共放送がパウハウスの映画を製作し放映したが、中でもヘルムを主人公とする多数の映画が作成された。

彼女は建築を学びたいと、建築学の講義に潜り込もうとして連れ出されてしまう。傷心し校舎を出ると、目前に女性の肉体美を強調する裸体彫刻が立っていた。そこで、ペンキで彫刻に帽子や服を描き女性美の強調を消してしまう。この出来栄えが素晴らしく、ついにグロピウスも建築の講義受講を許す……映画のフィクションのようだが、パウハウスの記録を読むと、ヘルムは1920年、校舎の彫刻毀損を行ったとし、譴責処分となり、夏学期は停学になっていく。パウハウスがデッサウに移転するときには同行を許されなかった。

校舎の天井の自作のステンドグラ



現在の自由学園生活工芸研究所の販売コーナー（自由学園明日館・JMショップ）。

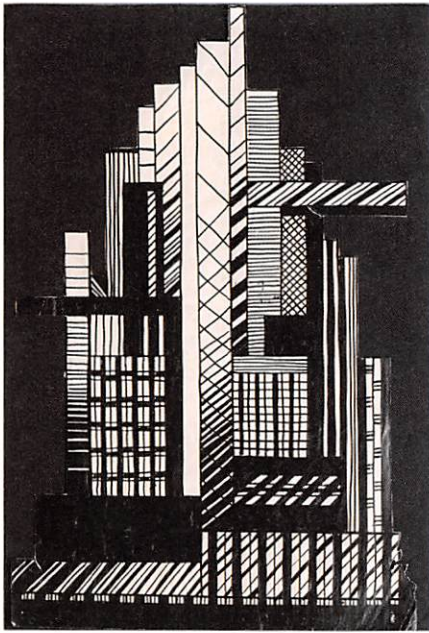
スに粘土を塗りたくり、汽車でロストックへ帰るヘルムは、車内で芸術家風の派手な服を田舎娘の服に着替える。北ドイツの平原をひた走る蒸気機関車の汽笛が鳴り、水蒸気を噴き上げ、映画は幕を閉じた。

自由学園とパウハウス

1932年、自由学園は卒業生の山室光子と今井和子（結婚後、笹川）

をパウハウスに送った。しかしすでにデッサウ校は市との対立が激しく、不安定な状態であった。そこで、イッテンがベルリンで開校した芸術学校「イッテンシュール」に学ぶ。

イッテンは授業の前に体操をさせ、体をほぐして絵画の制作を行うなど極めて特徴のある教育を行った。二人は帰国後、自由学園で指導にあた



今井(笹川) 和子の習作。イッテンシュール時代。自由学園所蔵



晩年、スイスにイッテン夫人を訪ねた笹川和子さん。写真／ご遺族提供

り、生活に根ざした工芸を学び合う「自由学園工芸研究所」を立ち上げた。デザイン・制作と同時に展示販売も

行い、家庭における「美しく真実な生活」のため、独自の産業として世に働きかけている。前述の山脇道子もこの活動に参加した。

「世の中に変革を」

パウハウスが幕を閉じた後、教員らは世界各地で活発な活動を展開する。ナチスはパウハウスを解体することはできたが、思想まで絶滅することはできなかったのである。

パウハウスは、あまりに多くの顔を持ち一口に説明するのは困難である。しかしデッサウ校で学び、大戦後ウルムにパウハウスを継承する「ウルム造形大学」を作った初代校長になったマックス・ビル（彫刻家・建築家）が言った、「芸術活動を通じて世の中の変革を求める」ということが一つの回答であろう。